

マネツグミを殺すことと狂犬を殺すこと

— アメリカン・ヒーローとしてのアティカス・フィンチ —

大 野 一 之

は じ め に

アメリカ映画協会 (American Film Institute) は2003年7月3日、アメリカ映画のナンバーワン・ヒーローとして『アラバマ物語』(*To Kill a Mockingbird*) (1962年) のアティカス・フィンチを選出した。奇しくもそのわずか9日後の7月12日、アティカス・フィンチを演じてアカデミー主演男優賞に輝いた俳優グレゴリー・ペックが87歳で他界した。グレゴリー・ペックは、『艦長ホレーショ』(1951年) のホレーショ・ホーンブロー、『白鯨』(1956年) のエイハブ船長、『マッカーサー』(1977年) のマッカーサー将軍といったいかにも英雄らしい英雄を演じたことのある大スターだったとはいえ、往年のハリウッド・スターの中でも、たとえばジョン・ウェインなどと比べるといささか地味な印象を与える。しかし彼が実人生において、アカデミー協会、アメリカ映画協会、ハリウッド俳優組合などの会長を歴任した経歴からもうかがわれるように、リベラルな政治思想をもつ人望の厚い人格者であったことはよく知られている。温厚で物静かな紳士であるが、自らの良心と信念に忠実で、自ずと人々の尊敬を集めてしまう、そんな性格をそのままスクリーンに持ち込んだような役柄がアティカス・フィンチであった。アティカスは南部の小さな田舎町で実直に暮らす一介の弁護士に過ぎない。およそ華々しさから縁遠いこのような人物がアメリカ映画を代表するベスト・ヒーローに選ばれた

ことを意外に思う向きもあるのではないだろうか。

ハリウッドの夢の工場 (dream factory) はこれまで数多のヒーローを生み出してきたが、その多くは派手なアクションを持ち味とし、手強い仇役を相手にスーパーマンよろしく超人的な活躍をするのが常だと言える。たとえば『レイダース/失われた《聖櫃》』(1981年)では、冒険好きの考古学者インディアナ・ジョーンズがナチの野望を阻止するために八面六臂の活躍を見せるし、『ロッキー』(1976年)の無名のボクサーはリングの上での死闘を勝ち抜いて最高の栄冠を勝ち取る。また『シェーン』(1953年)の主人公は西部の無法者を相手に孤軍奮闘し、『ダーティハリー』(1971年)のハリー・キャラハンも兇悪な犯罪者を容赦なく追いつめていく。一方、アティカス・フィンチは無類の冒険家でもなければ、最強のチャンプでもなく、西部の早撃ちガンマンや大都会のはみ出し刑事でもない。彼は男手ひとつで二人の子供を育てながらつましく暮らしているしがない田舎弁護士なのである。しかも彼は、映画だけでなく広くアメリカの社会や文化を論じる際にしばしば指摘される暴力性とはまったく無縁だといってよい。銃を嫌い、子供同士の喧嘩も許さず、我が子に体罰を加えたことさえないのである。この点でアティカスは、ハリウッドの人気のある典型的なヒーローたちと際立った対照を成す。

それでもアティカスがもっともアメリカ的なヒーローだといわれるとしたら、その理由は奈辺にあるのだろうか。作品の歴史的・社会的・文化的背景にも触れながら、映像作品とその原作を比較検討することによって、アティカスの資質と行動を吟味し、アメリカン・ヒーローとしての特質について考えてみたい。

マネツグミを殺すこと

『アラバマ物語』の原作は、ハーパー・リー (Harper Lee) のピュリツァー賞を受賞した同名のベストセラー小説 (1960年出版) であり、1962年にロバート・マリガン (Robert Mulligan) 監督によって映画化され、同年のアカデミ

一賞を主演男優賞、脚色賞、美術監督・装置賞（白黒）の3部門で受賞した。またアメリカ映画協会が選定した「アメリカ映画ベスト100」でも第34位にランクされ、高い評価を得ている紛れもない名作だと言える。作品の舞台は1930年代のアラバマ州メイカム。時代の流れに取り残されたようなこの深南部の小さな町で、貧しいが平穏な共同体の平安をかき乱すセンセーショナルな事件が勃発する。それは黒人青年による白人女性のレイプ事件である。弁護士のアティカス・フィンチは人種差別の厳しい環境の中、敢えて黒人青年の無罪を信じ弁護を引き受ける。アティカスにはジェムとスカウトという幼い子供がいるが、物語は成長したスカウトによる子供時代の回想という形式で語られる。物語のプロットにはレイプ事件の裁判とは別にもう一つ柱があって、子供たちが恐れると同時に抗しがたく惹き付けられる、近所に住むブーという謎の人物との交流が描かれる。

小説及び映像化作品の原題の「マネツグミを殺すこと」は、アティカスが息子と交わす会話に由来する。ジェムは、アメリカ南部の片田舎に暮らす10歳ぐらいの男の子らしく、銃や狩猟に強い関心をいだいている。お父さんは幾つ々ときにはじめて自分の銃を持たせてもらったのかと息子から尋ねられたアティカスは、次のように答える。

Thirteen or fourteen. I remember when my daddy gave me that gun. He told me that I should never point it at anything in the house. And that he'd rather I'd just shoot tin cans in the backyard, but he said that sooner or later he supposed the temptation to go after birds would be too much, and that I could shoot all the blue jays I wanted, if I could hit them, but to remember it is a sin to kill a mockingbird.¹⁾

ここでアティカスは、自分の父親の言葉を借りて、家の中で銃口を向けたりしてはいけないとか、庭でブリキ缶を撃つくらいにしておくようにと、子供の銃の取り扱いに関して一般的な注意を与えているのだが、そのうち小鳥を撃ちた

くなくても「マネツグミを殺すことは罪なのだよ」というのはいささか奇妙な注意で、ジェムにはよく理解できない。そこでアティカスはさらに説明を加える。

Well, I reckon because mockingbirds don't do anything but make music for us to enjoy. They don't eat people's gardens, don't nest in the corncribs, they don't do one thing but just sing their hearts out for us.²⁾

マネツグミは美しい声で精一杯囀ることによって人間に喜びを与えてくれるだけで、庭を荒らしたり、納屋に巣をつくったりして人に害を与えるようなことはしない。このような無害で罪もない鳥を殺すのはよくないことだという。リーの原作では、上記引用部分はアティカスではなく近所に住むフィンチ家と親しいモーディ婦人の言葉だというちょっとした違いがあるが、それよりも注目すべきは、小説では「マネツグミを殺すことは罪なのだよ」というアティカスの言葉について、「何かをするのが罪などとアティカスが言うのをこのとき以外に耳にしたことがなかった」³⁾というスカウトの感想が付け加えられている点であろう。

アティカスは、弁護士という職業柄、家庭においても子供相手に法律に関連した言い回しを使うことが多く、また普段から宗教的・道徳的意味の罪を指す“sin”という言葉をもやみに使用するのを意識的に避けていたのかもしれない。いずれにせよ、日頃の父親らしくない表現がスカウトにことのほか強い印象を残し、モーディ婦人への質問へとつながったようだ。青カケスであろうとマネツグミであろうと、野生の鳥を撃ち殺しても法律に反しないことは子供たちだって十分承知していたはずである。では、なぜマネツグミを殺してはいけないのか。少なくともアティカスが、滅多に使わない“sin”という言葉で言い表そうとしたのは、人間の定めた法だけでは対応できないより高度で根源的な道徳的問題の存在であったことは確かだろう。

ところで、マネツグミは、先ほど触れたこの作品を構成する二つのプロット

——つまりトム・ロビンソンの裁判についての物語とブーに対する子供たちの強い好奇心をめぐる物語——を結びつける要となるシンボルである。トムは近所の貧乏白人の娘の境遇に哀れみを覚えたばかりに冤罪を被り、最終的には副保安官によって射殺される心優しい黒人であり、一方、ブーは精神的な障害のために世間から隔離され、自宅に引きこもりながら隣人の幼い子供たちを守護天使のように優しく見守るが、子供たちを危機から救った結果、彼にとってもっとも耐え難い試練を受けることになったかもしれない人物である。いずれも共同体から疎外されたマージナル存在であり、その生来の美徳にもかかわらず、あるいはその美徳ゆえに社会的犠牲者にならざるを得ない。さらに、社会の周縁に位置する弱者として、この二人にフィンチ家の幼い子供たちを付け加えてもよいかもしいない。人種差別を受ける無実の黒人、世間の偏見に曝される、子供のような純真な心をもった世捨て人、そして彼らと直接・間接に関わる無垢なる子供たち。彼らに共通するのは“innocence”（無垢／無実）であろう。このイノセンスが、不当な差別や偏見、理不尽な暴力によって脅かされるようなことになると、自由や平等、個人の基本的な権利といったアメリカを支える国家の基本理念あるいは根本精神が大きく揺らぐことになる。「マネツグミを殺すこと」が暗示しているのは、まさしくそのような真の意味でアメリカ的と言っても過言でないテーマなのである。アメリカン・ヒーローとしてのアティカスの資質と行動は、このような視点から検討されなければならない。

歴史的・社会的背景

映画など大衆文化で活躍するヒーローの第一の条件は何をさておいても悪との対決であろう。アティカスも、地域の根強い人種的偏見と暴力の脅威にもかかわらず、自らの良心と信念にしたがって社会正義を貫く点で、ハリウッドの多くの典型的なヒーローと同じように、果敢に悪に立ち向かっていると言える。しかし彼の敵は単なる犯罪者や無法者とは違って、人種問題というアメリカの歴史や風土に深く根差した大きな社会問題に他ならず、容易に打ち倒せる

ような相手ではない。ここで、人種問題をめぐる南部の歴史と社会的背景を素描しておきたい。

アメリカは自由と平等を建国の理念として掲げながらも、南部における黒人奴隷制度を黙認することによって、大きな社会的矛盾を抱えたままイギリスから独立するが、やがてその矛盾は南北戦争（1861年～1865年）という形で爆発する。アメリカを二分し、本土を戦場として戦われたこの戦争の影響は広範かつ深刻であるが、人的被害だけでも実に60万人以上の戦死者という甚大な犠牲を払った結果、北部の勝利によって奴隷制度そのものは廃止され、400万人以上とも言われる黒人奴隷は解放された。ところが、現実には南部の黒人はそれ以降もジム・クロー制度の下、合法・非合法のさまざまな形で隔離され、事実上の差別を受け続ける。連邦の最高裁判所も1883年に、1875年の公民権法（公共の場における人種隔離を禁ずる）を否定し、1896年には「プレッシー対ファーガソン事件」の判決で「隔離すれども平等」（*separate but equal*）と述べて、人種隔離制度を容認することによっていわば人種差別に法的保証を与えさえる。しかし、やがて20世紀も半ばになって、1954年に最高裁判所が「隔離すれども平等」の原則を破棄し、その後の公民権運動の高まりによって、1964年に公民権法、翌1965年に投票権法が成立し、ジム・クロー制度がようやく打破された。こうして経済的な格差はともかく政治的・社会的差別は撤廃されて、黒人の諸権利が取りあえず確立することになる。

『アラバマ物語』の背景としては、舞台となったアラバマ州で起きた実際の歴史上の事件にも簡単に触れておく必要があるだろう。この作品の時代背景と同じ1930年代、正確には1931年にアラバマ州で黒人に対する冤罪事件が発生する。いわゆる「スコッツボロ事件」（*Scottsboro Case*）である。貨物列車内で二人の白人女性をレイプしたとして9人の黒人が訴えられ、いったんは有罪とされ死刑判決を受けたが、20年以上に及ぶ長期の裁判の結果、最終的には全員が無罪放免となった。白人女性がレイプで黒人男性を訴えるという事件の基本的構造、その女性の出身階層及びそれが招いたと思われる重大な偽証の疑惑、さらに公正を求めて人種的偏見と勇敢に戦った法律家（たとえばジェイム

ズ・E・ホートン判事)の活躍など、『アラバマ物語』との類似性がしばしば指摘される。アラバマ出身で父親が弁護士だったハーバー・リーがこの事件から少なからず影響を受けていることは確かだろう。

さらに、ちょうどリーが『アラバマ物語』を構想もしくは執筆していたと考えられる時期の1955年には、アラバマ州のモントゴメリーを走るバス内で黒人用座席の隔離に反発した一人の勇気ある黒人女性ローザ・パークスの逮捕をきっかけとして、バス・ボイコット運動が始まる。若きキング牧師に率いられたこの運動がさまざまな大衆的な直接行動を誘発しながら拡大して行き、結果として公民権運動を勝利に導くことになったことは周知のとおりである。そして『アラバマ物語』の映画化もまさにこの公民権運動の高まりのまっただ中で行われていることも確認しておきたい。ストウ夫人(Harriet Beecher Stowe)の『アンクル・トムの小屋』(1852年)が南北戦争当時の世論に大きな影響を及ぼし、第一の奴隷解放に深く関わったとするならば、その後約1世紀を経て発表された『アラバマ物語』は第二の奴隷解放ともいうべき公民権運動を象徴する作品だと言えよう。

建国の理念と人種差別

このように『アラバマ物語』はさまざまな形でアメリカ南部という風土性や人種問題と絡んだアメリカ固有の歴史と現実を反映させた作品として成立している側面がある。この文脈においてアティカス・フィンチに託されている使命は限りなく重い。アメリカという国家が依拠する根本理念が悪しき社会規範によって骨抜きにされ、多民族国家の統合の原理が危殆に瀕しているのである。アティカスにとって、一羽のマネツグミの命に集約されているのはアメリカの国家的課題であり、同時にそれは彼自身の人生の大きな試練をも意味する。アメリカ的理念を奉じる者にとって不可避とも言えるこの試練に臨んだ心境を彼が我が子に語り聞かせる場面がある。

父親が「黒ん坊」(nigger)の弁護を引き受けたと学校で友人に揶揄された

スカウトは、“nigger”という言葉の意味さえしっかりと理解しないまま取っ組み合いの喧嘩をしてしまう。アティカスは“nigger”がよくない言い方だと指摘すると同時にいかなる理由があろうとも喧嘩をしてはならないと娘に諭す。するとスカウトは町の多くの人たちが反対しているのにどうして黒人の弁護をするのかと、父親のせいでイジメを受ける子供としては至極もっともな疑問を父親にぶつける。

For a number of reasons. The main one is if I didn't, I couldn't hold my head up in this town. I couldn't even tell you and Jem not to do somethin' again.⁴⁾

「理由はいろいろあるよ。主な理由としては、もしそうしなかったら、お父さんはこの町で胸を張って暮らすことができなくなるのだよ。お前やジェムに何かをしてはいけないうと二度と言えなくなるのだよ」というのがアティカスの返事である。アティカスは、それが、弁護士として、父親として、さらには一人の人間として究極の拠り所になっている良心の問題であることを子供にもわかるような表現で述べている。この物語は父親という鏡を見つめながら自己形成をしていくスカウトの成長物語でもあるのだが、彼女の汚れを知らない純真無垢な心は、父親の精神を反映する鏡の役割を果たしているとも言える。読者や観客はこの鏡を通してアティカスの内面を知ることができる。

原作では、アティカスは「どの弁護士も生涯に少なくとも一度は個人的な影響を受ける事件を担当するものなのだよ」⁵⁾と付け加え、今回の事件が弁護士としてのアティカスにとって決定的な意味をもつことをさらに念押ししている。そして「アティカス、裁判に勝てるの？」(“Atticus, are we going to win it?”)というスカウトの素朴な質問に対して、アティカスは「勝てないだろう」(“No, honey.”)と驚くほど率直で悲観的な展望を漏らす⁶⁾。幼いころから子供に自分のことをファーストネームで呼ばせるほど平等主義の教育観に徹した父親であるとしても、まだ始まってもない重大な裁判の展望をこのように家族に、しかも幼い子供に告げるのはいささか軽率で、現実にはありそうもないやり

とりのように思われるが、これは、父娘の強い信頼関係を暗示するとともに、アティカスの見通しが町の大部分の人々によって共有されている既定の結論に過ぎないことも示唆しているのだろう。裁判の帰趨はやはり読者や観客の大きな関心の的であるが、映画版ではアティカスの悲観的展望を削除することによってサスペンスの維持とドラマの盛り上げを図り、それはそれで成功していると思われる一方、小説ではむしろ絶望的状況下で勝ち目のない戦いに挑むアティカスの不撓不屈の意志を強調していると言える。

さて、アティカスは裁判の過程で、法廷に提出された証拠（と言っても原告二人の証言のみであるが⁶）に対して反証を積み重ねて、黒人青年トム・ロビンソンの潔白を証明し、彼が南部の根深い人種偏見の犠牲者に他ならないことを力説しながら、次のように最終弁論を締めくくる。

The defendant is not guilty, but somebody in this courtroom is. Now, gentlemen, in this country our courts are the great levelers, and in our courts all men are created equal. . . . I'm no idealist to believe firmly in the integrity of our courts and in the jury system. That is no ideal to me. It is a living, working reality. Now I am confident that you gentlemen will review without passion the evidence that you have heard, come to a decision, and restore this man to his family. In the name of God, do your duty. In the name of God, believe Tom Robinson.⁷⁾

アティカスは、南部の動かしがたい人種差別の現実の壁をしっかりと見据えながらも、建国の父祖たちが世界に向かって高らかに宣言した高邁な人類の理想を12人の陪審員の心に呼び起こすことに一縷の望みを託しているように思われる。法廷や陪審制度も完全無欠ではないことを認めた上で、それでも法の下での万人の平等を訴えかけている。「すべての人間は生まれながらにして平等である」は、独立宣言の冒頭部分の一節をそっくりそのまま引用したものに違いない⁸⁾。同じ人間でありながら肌の色の違いによって、「生命、自由、幸福の追

求」といった基本的人権が奪われるようなことがあってはならない。それはまさにアメリカの建国の理念なのである。

スティーブン・スピルバーグ監督作品『アミスタッド』（1997年）では、スペインの奴隷船で反乱を起こした黒人をめぐる裁判で、アメリカ第6代大統領を務めたことのあるジョン・クインシー・アダムズが、独立宣言のこの同じ箇所を引用しつつ熱のこもった最終弁論を展開し、裁判の勝利と黒人の解放を導いているが、それはアティカスには叶わない結末であった。トム・ロビンソンは有名なもう一人のトム、「アンクル・トム」の場合と同様、悲惨な末路を運命づけられている。有罪の評決を下されたトム・ロビンソンは絶望の余り逃亡を企て、射殺されてしまう。映画では逃げ出したトムの足を狙った副保安官の銃弾が運悪く致命傷になったと説明されているのに対し、小説においては、アティカスの報告によると、看守の警告射撃を無視したトムは実に17発もの銃弾を浴びて死ぬ。ここには不運な事故死と意図的な惨殺ほどの違いがある。ごく近年においてさえ、非武装の黒人が警官から多数の銃弾を受けて射殺されるような事件がアメリカで起きていることを考えると、トム・ロビンソンの死の真相は想像するに難くない。

銃 と 非 暴 力

暴力はアメリカの映画や文学において極めて重要なモチーフの一つである。『アラバマ物語』でも暴力は作品の核心に関わる大きな意味をもつが、結末でジェムとスカウトがボブ・ユーエルに襲われる場面を省くと、暴力が直接描かれることはほとんどない。すでに述べたようにトム・ロビンソンの射殺は間接的に報告されるに過ぎないし、映画ではさらにそれが事故死のレベルまで弱められている。またメイエラ・ユーエルに対する父親の暴行も裁判の中でアティカスによって仄めかされるだけである。しかし、共同体の秩序や個人の平和な生活を脅かす暴力の存在は、物語を通して繰り返し暗示され、それが爆発寸前まで達する緊張した場面も描かれる。

黒人男性による白人女性のレイプという、およそ南部で考えられるもっとも衝撃的な事件の発生は小さなコミュニティを揺り動かし不安な影を投げかけずにはおかない。やがてそれが現実の切迫した具体的な形を取り始める。つまり黒人の犯罪容疑者にリンチという非合法的制裁を加えようという動きである。レイプの被害者の属する「貧乏白人」(poor white) と呼ばれる貧しい農民たちの間に不穏な空気を察知した保安官は、機先を制すべく行動を起こす。その留守の間、トムが入れられている留置場の見張りを依頼されたアティカスが寝ずの番をしているところに、保安官の裏をかいた群衆が押しかけてくる。何台もの車に分乗してやってきた彼らは手に手にライフル銃をもち、アティカスにトムの引き渡しを強く迫るのである。

ところで、人種問題が絡んだリンチは南部社会にあってはかつてその風土性の一部だったと言ってもよい。ある資料によれば、アラバマ州において、1889年から1940年までの約50年の間に記録に残っているだけでも303件のリンチ事件が発生し、その殆どが黒人を対象としたものであった。したがって1930年代に設定された『アラバマ物語』にこうしたリンチの場面が出てきても決して非現実的ではないだろう。もちろんこの種の場面にははらはらどきどきの作劇上の効果が期待されるわけであるが、ただそれだけではない。リンチの場面は物語の中心テーマを考える上で一つの重要な鍵を提供してくれる。

圧倒的な暴力による脅迫に対して、孤立無援で、読みかけの新聞を手にしただけのアティカスに対抗すべき暴力的な手段は存在しない。彼は自ら信ずるところにしたがって人々を精一杯説得するだけである。銃で武装した大勢のリンチの暴徒にリベラル派の弁護士がたった一人で立ち向かう光景に、この作品の人種問題をめぐるイデオロギー的対立の基本構図を見て取ることができる。人種差別主義対リベラリズム、暴力対非暴力、暗黙の社会規範対法による秩序といった対立に加えて、階級的な要素さえ含まれているかもしれない。眼鏡をかけ身なりもきちんとしていたいかにも知的な紳士といった風情のアティカスに対して、押しかけてきた群衆の方は、擦り切れた作業着姿で、階層の違いが歴然としている。アティカスは堂々と群衆と対峙し、いささかも怯む様子がない。し

かし彼の確固たる信念をもってしても、人種偏見のせいで理性的判断力を失った多数の人間を説き伏せることができるかどうかは甚だ疑わしい。実際、後にこの群衆と同じ階級に属すると思われる陪審員たちが、トム・ロビンソンの裁判で誰の目にも明らかな無実の証拠にもかかわらず、有罪の評決を出しているのである。

アティカスの危機的状況は、父親の身を案じて駆けつけた子供たちのおかげでかろうじて回避される。まだ幼いために必ずしも十分に状況を理解していないスカウトの無邪気な言動が、暴徒のリーダー格の一人でスカウトの級友の父親でもある顔見知りの農民の心を動かし、彼にその場から仲間を引き上げさせるのである。汚れを知らない子供の無垢な心が、墮落した大人の良心を蘇らせる。こういう物語展開は確かにセンチメンタルには違いないが、たとえばマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年)やサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』(1951年)に見られるように、アメリカ文学は伝統的に「無垢」あるいは「イノセンス」にこだわってきたことを考えると、この場面における子供たちの登場は注目に値する。法と無秩序、非暴力と暴力、リベラリズムと人種差別主義という根本的対立とその緊張が頂点に達しようとした瞬間にイノセンスが介入し、問題の最終的決着はともかく、少なくとも決定的な衝突だけは回避される。

ここで、暴徒が手にしている銃にも触れておく必要があろう。銃はアメリカの映画や小説ではおなじみの小道具であるが、それはアメリカの歴史と社会の特徴的な側面を照らし出してくれる。銃は開拓時代以来ずっとアメリカの日常生活の必需品であり、文化の一部であったとさえ言えるだろう。現代にあってもしばしば銃社会や銃規制の問題が取り沙汰されるように、銃は犯罪や無法な暴力に用いられる主要な道具である一方で、周知のように銃による市民の武装はアメリカ合衆国憲法で保証された権利でもある¹⁰⁾「個人の武装という理念は、自立した個人の自由、国家権力の制限、コミュニティの自治など、いずれも近代市民社会が正の価値としてきたものにその起源を持っている」¹¹⁾と考えることができるのなら、銃は暴力や犯罪といったマイナスのイメージと結びつ

くと同時に、自由の象徴としてアメリカの文化における重要な役割を担ってきたはずである。

アメリカ大衆文化の伝統的ヒーローは個人の自由や社会の弱者を守るために銃を武器にして悪と戦うことが多い。西部の早撃ちガンマンであれ都会の刑事であれ、射撃の名手という点で、彼らは皆、クーパー (James Fenimore Cooper) の生み出したナティ・バンポの子孫だと言えるだろう。『アラバマ物語』において、我が子への体罰や子供同士の喧嘩も含めてあらゆる暴力を否定し、銃の取り扱いについてもことのほか慎重なアティカスもまた射撃の名手であることが判明する興味深いエピソードがある。ある日フィンチ家の子供たちが外で遊んでいると、ティム・ジョンソンという近隣の老犬が唸ったり、飛び跳ねたりしながら通りをやってくるのが見える。どうやら狂犬病に罹っているらしい。フィンチ家の黒人女性コックのキャルの連絡で保安官とアティカスが車で駆けつけてくる。危険なので直ちに犬を射殺しなければならないが、射撃の腕に自信のない保安官からライフル銃を渡されたアティカスは、見事に一発で仕留め、これまで父親が銃をもつところさえ見たことのなかった子供たちをびっくり仰天させる。

ジェムとスカウトはこの出来事で、アメリカの伝統的な文化で一般に広く受け入れられている強い父親像に基づいて、自分たちの父親を再認識するわけであるが、このエピソードに含まれる意味はそれ以上に大きいと思われる。リベラルな知識人を象徴するような眼鏡を放り捨て、イノセントな子供たちを守るために、ライフルで狂犬に狙いを定めるアティカスの姿は、アメリカン・ヒーローの原型ともいべきナティ・バンポを彷彿させる。たとえば『モヒカン族の最後』(1826年)において「長いライフル」や「ホークアイ」(鷹の目)の異名をもつ射撃の名手ナティ・バンポは、うら若い清らかな乙女たちを守るために、凶悪なヒューロン族に向けて必殺の弾丸を放つ。そこには、無垢な弱者を守るために邪悪な敵に敢然と立ち向かう原初のアメリカン・ヒーローの姿がある。その末裔たるアティカスも、無実のトム・ロビンソンを不法な制裁から守るためにリンチの暴徒の前にたった一人で立ちはだかったように、幼い子供

たちを狂犬から守るために長年触れたこともなかったライフルを手に取りさえする。

しかしながら、言うまでもなく、現代のアメリカン・ヒーローである彼は、もはやフロンティアに生きる「高貴な野蛮人」ではあり得ないし、いやしくも法を生業とする弁護士であってみれば、「自分自身が法であり、裁判官兼死刑執行人」(a law unto himself: judge and executioner)¹²⁾であるといったことは許されるはずもない。そのようなアティカスが人間の姿をした狂犬ともいべき存在と対決しなければならなくなったとき、彼にとって最大の試練が訪れるのである。

狂犬を殺すこと

すでに述べたように、トム・ロビンソンの裁判をめぐるアティカスの戦いにはもともと勝算はなかったといえる。そもそも法の制度そのものが完全ではない。司法制度における民主主義の根幹ともいえる陪審制に関しても、当時の南部の裁判では、陪審員を務めるのは白人男性ばかりで、女性も有色人種も含まれていない。しかも階級的な偏りも見られ、人種偏見が根強い階層の出身者で構成された陪審でのアティカスの勝利は到底望めない。黒人の裁判は形ばかりのもので、速やかに有罪の評決が出るのが通例なのに、トムの場合には陪審の審理に時間がかかったという事実でアティカスの努力がある程度報われたと考えるのがせいぜいのところだろう。映画では、トム・ロビンソンの有罪判決が下されて裁判が終了し、他の白人たちはみんな引き上げてしまった後、アティカスが一人退廷する場面が強い印象を残す。人種分離政策によって棧敷に設けられた黒人用傍聴席の黒人たちがジェムやスカウトとともに、アティカスに敬意を表して全員起立して彼を見送る。ところが、アティカスの健闘を称えるこの静かな感動を呼び起こす場面で物語は終わらないのである。

ボブ・ユーエルの正式名、Robert E. Lee Ewellはいかにも南部を象徴するような名前だが¹³⁾彼は“poor white”あるいは“white trash”と呼ばれる南部白人

社会の最下層に属する人間であって、酒浸りの怠け者で、我が子にも暴力を振るう凶暴な人物である。彼は、白人であるという理由だけでとりあえず裁判には勝利したものの、人種の壁を越えて真相を究明するアティカスによって、娘に対する暴行や娘が黒人を誘惑しようとした事実などを暴かれ、白人としての自尊心を傷つけられる。その結果、罪もない親切な黒人の若者を死に追いやっただけではならず、今度はアティカスの子供たちにも牙をむく。

ハロウィーンの夜の演劇会からの帰り道に、ジェムとスカウトはナイフを手にしたボブ・ユーエルに襲われる。ジェムはボブ・ユーエルとの格闘で腕を骨折し気絶するが、見知らぬ人物によって救われて無事家に送り届けられる。そして襲撃の現場ではボブ・ユーエルの刺殺死体が発見される。文字通り狂犬のような男から子供たちを救い出したのは、あのブー（アーサー）・ラドリーであった。ユーエルを刺したのは間違いなく彼であるが、それは子供たちを救うためであったし、世間の目を避けてひっそり暮らしている人間を無理矢理引っ張り出すのは罪だといって保安官はブーを見逃し、アティカスも暗黙の同意を与える。

物語の結末におけるいささか唐突なブーの登場は、「デウス・エクス・マキナ」(deus ex machina) 的な不自然な仕掛けを感じさせないでもないが、それぞれが暴力的な死で終わる物語の縦糸と横糸をとりあえず一本に纏り合わせることに成功しているように思える。人種偏見の不幸な犠牲者となったトム・ロビンソンに続いて、罪なき者を死に追いやった張本人も死を迎え、因果応報によりある種の道徳的バランスが回復する。そしてスカウトは念願が叶って長い間好奇心の対象であった謎の人物とついに対面することができる。このようなメロドラマの展開を今さら言挙げしてみても仕方がないかもしれないが、これまで論じてきた文脈に照らして検討しておくべき問題点がやはり残るだろう。

第一の問題点と思われるのは、子供たちを暴力から救ったのはやはり同じ暴力だったという点である。

And it is not the law that protects the children from Bob Ewell. Ironically,

although the novel leads us to deplore the violence of the lynch mob that disrupts law, it is only an act of violence rather than law that protects the children from a literal mad dog and a human mad dog, Bob Ewell.¹⁴⁾

ここでジョンソンが的確に指摘しているように「子供たちをボブ・ユーエルから守ってくれるのは法ではない。皮肉なことに、この小説は法を破るリンチの暴徒の暴力を嘆くように読者を導くけれども、子供たちを、正真正銘の狂犬、人間の姿をした狂犬であるボブ・ユーエルから守ってくれるのは法ではなくて一つの暴力行為」なのである。さらに映画には出てこない言葉であるが、原作の保安官は、ユーエル殺しに目をつぶるように説得する際、アティカスに次のようなことを言っている。

“Mr. Finch, there’s just some kind of men you have to shoot before you can say hidy to ’em. Even then, they ain’t worth the bullet it takes to shoot ’em. Ewell ’as one of ’em.”¹⁵⁾

挨拶する前にさっさと撃ち殺してしまったほうがいい連中がいるものであり、ユーエルはそういう連中の一人だったというのだが、これはブッシュ大統領の「先制攻撃論」を想起させる、かなり物騒な発言に違いない。アティカスが狂犬を一発で仕留めるほどの射撃の名人であることを考え併せるとさらに現実味の増す言葉である。善玉と悪玉がはっきりと区別できるこの作品でボブ・ユーエルは南部社会の人種差別と道徳的墮落を一身に体現する邪悪な人物として描かれており、仮にアティカスによって撃ち殺されたとしても大方の読者や観客の共感を得ることができただろうし、むしろその方がアメリカン・ヒーローとしてのアティカスに相応しいと言えるかもしれない。

ところが、前述のように現代社会で弁護士として生きるアティカスが裁判官兼死刑執行人を務めるわけにはいかない。彼には狂犬を撃ち殺すことはできても、狂犬のような人間に向かっていきなり銃を撃つようなことはやはりできな

い。そこにアティカスの非暴力主義やリベラリズムの限界，暴力に対する法の有効性の限界というものが露呈する。言い換えると，現代のアメリカン・ヒーローとしてのアティカスには限界がある。

汚れていない怪物

物語の結末に関するもう一つの大きな問題点は，ユーエル刺殺事件のもみ消しにアティカスが加担する事実である。確かに，正義や平等の理念に基づき人種の壁を越えて真相の究明に努めてきたアティカスが，いくら社会的弱者への思いやりからとは言え，この事件そのものの隠蔽に同意するのでは首尾一貫性を欠くだろうし，アティカスの法律家としての資質について重大な疑念も生じかねない。

If Boo Radley has cast a shadow upon the development of the children throughout the unfolding story, the way in which his killing of Bob Ewell is covered up by those in authority leaves the unavoidable impression that for Maycomb, and by extension for Alabama more generally, 'Law' and its 'Order' are to be manipulated by those who, it is presumed, know best. *To Kill a Mockingbird* generates serious moral and social issues. But in order to bring them to a satisfying conclusion, film and book take refuge in the very suppression of truth and deception of a community which the assumed story has attempted to expose.¹⁶⁾

ニコルソンによれば，ユーエル刺殺のもみ消しは，「法とその秩序」は当局者が操作できるものだという拭い難い印象を残す。『アラバマ物語』は，原作及び映像作品とも，提起した深刻な道德問題や社会問題を「満足のいく結論に導くために，まさに想定される物語が暴こうしてきた共同体の真実と欺瞞の隠蔽そのものへと逃げ込んでいる」という。果たして意図されたものかどうかは別

として、この種のアイロニーの存在を全面的に否定することは難しいだろう。しかしながら、だからと言ってそれが作品に致命的な打撃を与えたりか、アティカスのアメリカン・ヒーローとしての地位が揺らぐといった事態には立ち至らないように思われる。むしろ、法の外においてであれ、ともかく正義が遂行され、善悪の帳尻があったという印象の方が強いのではないだろうか。

『アラバマ物語』にディルという名前が登場する小さな男の子が、ハーバー・リーの幼いころからの親しい友人であるカポーティ (Truman Capote) をモデルにしていることはよく知られている。想像力豊かなディルはブーという謎の人物に夢中になり、その恐ろしい姿を何とか見ようとジェムやスカウトをけしかけける役割を果たすのだが、そのブーは、ジェムの説明によれば、身長6フィート半で、食べ物は生きたままのリスや猫、顔には長いぎざぎざの傷跡、歯は黄色で腐り、目は飛び出し、いつも涎をだらだら垂らしている。まさしく怪物である。一方、カポーティの遺作『叶えられた祈り』(1987年)の冒頭には、「汚れていない怪物」(Unspoiled Monsters)¹⁷⁾を探し求める8歳の女の子の話が置かれているが、同じ8歳の女の子スカウトが探し求めたブーもまた「汚れていない怪物」であったと言えよう。不幸な境遇故に社会的不適応を起こし隠者のような生活を送るブーは、大人になっても子供の純真無垢な心を保ち、密かな贈り物で隣家の幼い兄妹と心を通わすような人物である。カポーティの「汚れていない怪物」がアメリカの文学に特徴的なイノセンスへのこだわりを示しているとするならば、ブーの場合も同様であろう¹⁸⁾。

『アラバマ物語』における作者の基本戦略の一つが、『ハックルベリー・フィンの冒険』を書いたマーク・トウェインの響に倣って、視点として設定したスカウトの「汚れを知らない」目を通して、南部社会の「汚れた」現実を批判的に描くことにあったと考えて間違いないだろう。映画化に際して、物語の重心が子供たちからアティカスに移動したとしても、イノセンスは戦略ポイントとして維持されているように思われる。ただし、物語の結末にデウス・エクス・マキナの形で登場するイノセンスは、暴力としてのイノセンスであることを忘れてはならない。言い換えると、アメリカン・ヒーローとしてアティカスが果

たし得なかった行為を代行するブーは、荒野に生きるナティ・バンポや彼のモヒカン族の仲間たちと同様、いわば高貴な野蛮人であり、「無邪気に破壊を行う自然の子供たち」(innocently destructive children of nature)¹⁹⁾の一人に他ならない。この意味でブーの暴力は、文明の基盤たる法の領域外における、法を超越した本能的な道徳性の発露だと言えよう。これは、ブーによるユーエル刺殺が、真っ昼間の町の通りにおける狂犬の射殺とは違って、森という自然の領域の、光の射さない夜の闇の中でなされる所以でもある。

もう一言付け加えるならば、イノセンスが振るう暴力もやはり暴力であり、「汚れていない怪物」もやはり怪物には違いない。社会問題の次元ではなく形而上学の次元でこの問題を追究したメルヴィルもまた、『ビリー・バッド』(1924年)においてマネツグミと狂犬の運命を、戦時の軍艦上で発生した上官殺しを核に劇化している。ビリー・バッドの無垢の一撃が悪の権化たるクラガートを打ち倒したとき、ヴィア艦長が発した「神のみ使いに撃たれて死んだのだ。だが、み使いは絞首刑に処されなければならない」(Struck dead by an angel of God! Yet the angel must hang!)²⁰⁾は、ことによるとアティカスの苦悩の叫びでありえたかもしれない。『アラバマ物語』においては、「神の前では罪なき者」(a fellow creature innocent before God)²¹⁾も地上の法廷に引きずり出されて、必ずしも完全ではない法の裁きの対象になるという悲劇的状况や、文明と自然、法と良心、外見と真実をめぐる、さまざまな矛盾を孕んだ複雑な問題は巧みに回避されているのである。

お わ り に

アティカスはこの物語において、自らの信念と良心にしたがって、マネツグミを守るために人種差別という狂犬²²⁾に立ち向かうのであるが、すでに見たように、少なくともリンチの暴徒と対峙するときと子供たちがユーエルに襲われるときはほとんど無力であり、いずれの場合にもイノセンスというデウス・エクソ・マキナの出現に救われているのは決して偶然ではない。アティカスは

文明社会の理性と法を何よりも重んじる人物であり、自然あるいはイノセンスの対極に位置する存在だと言える。したがって、一時的にせよ法の効力が及ばない領域で暴力もしくは狂気と対決するとき、彼の限界が露呈する。それは銃も持たずに狂犬に挑むようなものだからである。

アティカスはまた何よりもまず「普通の人」である。あくまでも我々と同じ日常生活を送る普通の人だが、アメリカを支える基本理念と道徳に基づいて、社会的弱者のために世の中の差別や偏見、暴力や不公正に果敢に挑む点にアメリカン・ヒーローとしての本質がある。普通の人であるから、当然のことながらさまざまな限界もある。しかしそれにもかかわらず、自らの信念と良心にしたがって全力を尽くす、そういう等身大のヒーローであるからこそ、現代の多くの読者や観客の心をいまだにしっかり捉え続けているのだろう。彼は特定の時代の特定の風土から生まれたヒーローであるが、時代と地域を越えて、アメリカが本来のアメリカであり続けるためには、さらに人間が人間として胸を張って生きていくためには、何が一番大切なのかを常に思い出させてくれるような存在なのである。

注

- 1) Horton Foote, *To Kill a Mockingbird, Tender Mercies, and The Trip to Bountiful: Three Screenplays* (New York: Grove Weidenfeld, 1989), p. 33.
- 2) Horton Foote, p. 33.
- 3) Harper Lee, *To Kill a Mockingbird* (New York: Warner Books, 1982), p. 90.
- 4) Horton Foote, p. 43.
- 5) Harper Lee, p. 76.
- 6) Harper Lee, p. 76.
- 7) Horton Foote, p. 67.
- 8) 「独立宣言」の該当箇所は以下のとおりである。

“We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the

マネツグミを殺すことと狂犬を殺すこと

- pursuit of Happiness.” (<http://www.law.indiana.edu/uslawdocs/declaration.html>)
- 9) Claudia Durst Johnson, *To Kill a Mockingbird: Threatening Boundaries* (New York: Twayne, 1994), pp. 5-6.
 - 10) 「アメリカ合衆国憲法」修正第2条を以下に引用しておく。

“A well regulated Militia, being necessary to the security of a free State, the right of the people to keep and bear Arms, shall not be infringed.”

(http://www.archives.gov/national_archives_experience/charters/bill_of_rights_transcript.html)
 - 11) 小熊英二『市民と武装——アメリカ合衆国における戦争と銃規制』（慶應義塾大学出版会, 2004), 60頁。
 - 12) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (1960; Rev. ed., New York: Stein and Day, 1966), p. 194.
 - 13) もちろん Robert E. Lee はかの有名な南北戦争を戦った南軍の総指揮官の名前である。
 - 14) Claudia Durst Johnson, *Understanding To Kill a Mockingbird: A Student Casebook to Issues, Sources, and Historic Documents* (Westport, Connecticut: Greenwood, 1994), p. 4.
 - 15) Harper Lee, p. 269.
 - 16) Colin Nicholson, “Hollywood and Race: *To Kill a Mockingbird*,” in *Cinema and Fiction: New Modes of Adapting, 1950-1990*, ed. John Orr and Colin Nicholson (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1992), p. 159.
 - 17) Truman Capote, *Answered Prayers* (New York: Random House, 1987), p. 3.
 - 18) 川本三郎『フィールド・オブ・イノセンス』（河出書房新社, 1991), 10頁参照。
 - 19) Leslie Fiedler, p. 194.
 - 20) Herman Melville, *Billy Budd, Sailor* (Chicago: The University of Chicago Press, 1962) p. 101.
 - 21) Herman Melville, p. 110.
 - 22) Cf. Carolyn Jones, “Atticus Finch and the Mad Dog: Harper Lee’s *To Kill a Mockingbird*,” in *Harper Lee’s To Kill a Mockingbird*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1999), pp. 99-113. ジョウンズは、「メイカムの本当の狂犬は、トム・ロビンソンの人間性を否定する人種差別である」と主張している。